

三単現の語尾はなぜ表示されなければならないのか

濱 崎 孔一郎

(2007年10月23日 受理)

Why Should the Third Person Singular Verbal Ending Be Marked?

HAMASAKI Ko-ichiro

0 序

(1) に示すように、現代英語において、主語が一人称や二人称のとき、あるいは三人称であっても複数の場合には動詞に屈折語尾が付くことはないが¹、三人称複数形の場合には特定の語尾が現れる。

- (1) a. I snore.
 b. We snore.
 c. You snore.
 d. He snores.
 e. They snore.

三単現の語尾の表示は初学者の段階で習うきわめて基本的な文法事項である。しかし、そもそもなぜ三人称・単数の場合にだけ動詞の屈折語尾が表示されなければならないのだろうか。このことを、英語という言語の形式と意味、機能の面から考察していくのが本論の目的である。

本稿での議論は、以下のように構成されている。まず、第1節では、動詞の現れる三単現の屈折語尾がどういう条件が整ったときに付加されるのか、その要因を明らかにしていく。次に、第2節では最近の言語理論によってこの屈折接辞が統語構造上どのような位置づけをもつと分析されてきたかをふり返り、それぞれの分析の妥当性について検討する。第3節では、この屈折接辞と密接な関係があるとされている法助動詞との関係をLangackerの認知文法の研究をもとに明らかにする。以上の議論を踏まえ、第4節では、それぞれの要因においてなぜ屈折接辞が具現化されるのか、その意味はどういうところにあるのかを有標性理論を用いて説明できることを主張していく。第5節は結論である。

1 時制と一致

1.1 時制

本節では、三単現の屈折語尾にどのような要因が関わっているのかということ、観察される事実から明らかにしていく。まず最初に次の例を見てみよう。

- (2) a. He snores.
b. He snored.

この2つの例は、いずれも主語が三人称・単数であるが、問題となっている三単現の-s語尾が現れているのは、(2a)の現在時制の文だけであり、(2b)の過去時制の文には異なる形態の語尾はあるものの、問題となるs語尾は現れていない。上述の(1)の例文を全て過去時制に変えると、(3)に示される通り、どの例文においてもそれぞれの動詞に-ed語尾が添えられなければならない。¹

- (3) a. I snored.
b. We snored.
c. You snored.
d. He snored.
e. They snored.

ここで注意すべきは、(3d)の例から分かるように、過去時制になると三単現の屈折語尾が現れる余地はなくなるということである。もちろん、その他の例から分かるように、過去時制では、一貫して過去時制を示す語尾が現れ、時制以外の要因が介在する余地はなくなっている。このことは、過去時制を表す語尾が現れる要因としては、他の要因よりも時制という要素が優先的に関与しているということを示している。以上のことから、他の要因が介在しているにせよ、この三単現の屈折語尾の有無には、まず現在時制対過去時制という対立が関わっているということが分かる。

1.2 人称・数における一致

では、第2の要因としてどのようなものが関わっているのかということ、次に考察してみよう。前節で、第1の要因として時制（より正確には、現在時制対過去時制の対立）が関わっていることが明らかになったので、時制以外の要因をあぶり出すために、時制は全て同じにして検討することが必要である。そこで、次の例を比較してもらいたい。

- (4) a. I snore.
b. You snore.
c. He snores.

これらの例はいずれも現在時制の例である。したがって、時制の違いによる要因が介在しないことは保証される。(4a)は一人称主語の例、(4b)が二人称主語、(4c)は三人称主語の例である。これらの例のうち、いま問題とされている語尾が現れているのは、(4c)だけであり、(4a)や(4b)にはこの語尾は出現していない。つまり、主語が三人称の場合にのみ屈折語尾が出現し、その他の人称（一人称や二人称）のときには屈折語尾は現れない。それゆえ、時制以外の要因としては、三

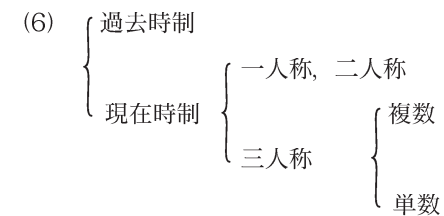
人称対一人称・二人称の対立が関わりをもつと推定される。一人称か二人称かという対立は関係していないのであるから、ここでは単なる人称の違いとかいうよりも、三人称対非三人称の対立と捉える方が適切であろう。このことがどういう意味を持っているかについては、後ほど考察する。

さて、ここまでの議論を見ると、まずは時制の対立、次に人称の対立が関わっていることが確認できた。しかし、関わりのある要因はそれだけではない。次の例を見てみよう。

- (5) a. He snores.
b. They snore.

(5a)は、現在時制の文で主語が三人称単数の例であり、一方(5b)の例は現在時制で主語が三人称複数形の例である。つまり、時制と人称に関する条件は全く同じにしてある。ところが、前者には屈折語尾が付いているのに対して、後者には屈折語尾は現れていない。いずれの例も時制と主語の人称は同じであるのだから、時制と主語の人称以外の要因が関わっていることになる。両者の違いは主語の数、すなわち単数・複数形の区別にある。それゆえ、この屈折語尾の出現・非出現に関わっている第3の要因としては、主語が単数か複数かという対立が関わっていることは明白であろう。つまり、この屈折接辞の出現に関わりのある要因には、時制だけではなく、主語の人称・数との一致も含まれるということである。

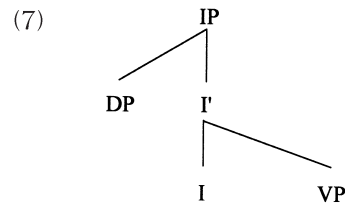
以上の議論をまとめると、三単現の語尾が現れるか現れないかは、まず現在時制か過去時制かという対立のうち、現在時制の場合だけであるということ。ところが、現在時制の場合でも非三人称（一人称と三人称）対三人称という人称における対立と主語の数の対立という要因に応じてこの語尾の現れなかつたり現れたりという違いが生じている。これを図式化すると次のようになる。すなわち、過去時制対現在時制の対立によって過去時制の屈折接辞-edの有無が決まり、現在時制の中では主語が三人称で、なおかつ単数の場合に三単現の屈折接辞-sが定まるということが明らかになった。²



2 機能範疇の句構造

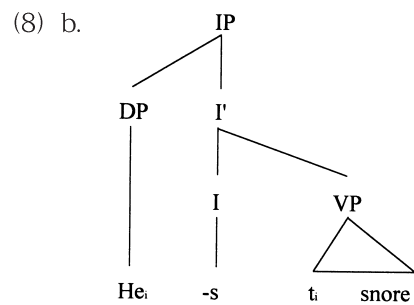
本節では、前節で観察されてきた事実が、現代の言語理論の枠組みではこれまでどのように扱われてきたのかを検討し、その問題点を探っていくことにする。ここでは、生成文法理論の枠組みに基づいて検討していく。生成文法理論の中でも、とりわけChomsky (1981, 1986)のいわゆる原理と媒介変数によるアプローチ (principles and parameters approach) の段階の分析方法からスタートしていく。というのも、この枠組みにおいて、それまではいわゆる意味内容をもつ語彙範疇

(lexical category) を中心とした統語構造の分析が主であったのが、時制を含むさまざまな文法機能を果たす要素が統語構造上、どのような構成になっているかが明らかになっているからである。その後の極小主義 (minimalism) への発展もあるが、基本的な部分は変わらない。いわゆる機能範疇 (functional category) に属する要素も語彙範疇と全く同じような普遍的な句構造をなしていると仮定された。それを樹形図に表したのが以下の例である。³



(7) のIの位置を屈折接辞が占めると考えられていた。Chomsky (1986: 2) では、時制と一致による要素、それに法制が関わりと記述されている。すなわち、これらの機能範疇に属する要素が主要部 (head) となり、語彙範疇と同じような投射を成しているという考え方である。具体的に先に挙げた例を適用してみよう。すると、(8a) (= (2a), (4c)) の例は (8b) のように示すことができる。⁴

(8) a. He snores.



(8a) の例を見ると、一見したところでは、主語名詞句の後に動詞が現れるかのように見える。しかし、次のような事実を観察すると、実際の構造はやはり (8b) のように捉えた方がよいことが分かる。すなわち、主語の後の位置には、時制等を表す屈折接辞が現れ、ここに語彙範疇のVP内にあった非定形の動詞snoreが移動してきて屈折接辞と合体しsnoresという形態を生じるという分析方法である。その根拠を以下の例を基に考えてみよう。

- (9) a. He does snore.
 b. Does he snore?
 c. He does not snore.

- (10) a. He will snore.
 b. Will he snore?
 c. He will not snore.

第1に、(8a) で示されている事実を強調して伝えたいときには、(9a) のような構造になる。これを見ると分かるように、屈折接辞は助動詞doの助けを借りて述語動詞とは異なる要素となり、これが主語に後続する位置に現れている。述語動詞はその後に現れる。この事実、(7) のような構造を採用することによって説明が可能になる。第2に、(8a) に対応する疑問文や否定文を見てみると、それぞれ (9b) と (9c) のようになる。(8a) では屈折接辞が動詞語尾として現れているが、(9b) と (9c) では助動詞doの助けを借りて異なる位置に現れている。この場合の助動詞doは、(10) に示される対応する例文を見ると分かるように、語彙的動詞ではなく法助動詞と同じような振る舞いを示している。これらの事実、屈折接辞が述語動詞から独立して疑問文や否定文の形成という文法的な操作の際に一定の何らかの文法的機能を果たしているということを示唆する。したがって、これらの事例も、(8b) のように語彙的動詞と屈折接辞を異なる位置に設定した構造を仮定する根拠といえよう。第3に、(7) のような構造を仮定すると、文副詞 (sentence adverb) や遊離数量詞 (floating quantifier) の分布の説明が可能になる。次の例で考えてみよう。

- (11) a. Probably, John left.
 b. John probably will leave.
 c. John will probably leave.
 d. *John will buy probably shoes.

(Sportiche (1998: 31))

(11) は文副詞probablyがさまざまな位置に現れているが、(11a, b, c) に示されているように、動詞句の外に現れていると文法的であるのに対して、(11d) におけるように、動詞句内部に現れると非文法的になる。文副詞の分布が奇妙なのは、この副詞が文全体、より正確には命題内容を修飾しているにもかかわらず、修飾する要素の内側の位置に現れている点である。(11a, b, c) も修飾する構成素の内側に現れているのにこちらは文法性に異常は見られない。これは、どのように説明すればよいのであろうか。

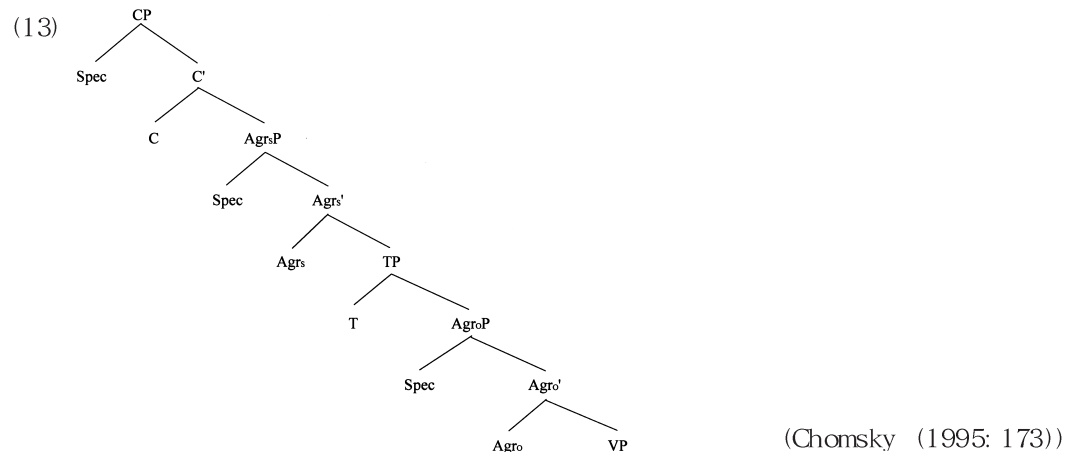
(11a, b, c) と (11d) の違いは、(11d) の場合だけ文副詞が動詞句内部に現れているのに対して、(11a, b, c) では、動詞句 (より正確には動詞とその目的語) の外側に文副詞が現れている点にある。文副詞が、命題内容 (すなわち、主語+動詞句) を修飾するのであれば、文副詞の位置は主語よりも前の位置であるということと、動詞句内部から主語だけが文副詞を飛び越えて移動したと考えるしかない。これは、まさに (7) の構造である。(7) では、もともと動詞句内部に主語名詞句と動詞や目的語からなる命題内容を表す要素があると仮定しており、ここからIの位置を越えてIPの指定辞位置に主語が移動するという考え方である。このような考え方は突飛なものではない。この分析方法をとれば、さらに次に示す遊離数量詞の奇妙な振る舞いも説明することが可能である。

- (12) a. The students should all/both/each get distinctions.
 b. The students all/both/each got distinctions.

(Radford (2004: 245))

(12a, b) の例において、意味の上から考えると数量詞 all, both, each は主語名詞句を修飾していると考えられる。ところが、修飾する要素である数量詞と主語名詞句は別々の位置に現れている。このような現象を (7) の構造は説明できるのであろうか。できるのである。先ほどの文副詞の議論でも触れたように、主語名詞句は、本来動詞句の指定辞位置に生成される。そして、この位置から何らかの理由により IP の指定辞位置に移動したと考えているのである。もともと動詞句内部にあったとするとその時点で数量詞と主語名詞句は隣接し修飾・被修飾の関係が隣接によって表されていた。それが、数量詞だけを置き去りにして IP の指定辞位置に移動したためであると考えたと説明がつく。そもそも動詞句内部に主語名詞句や目的語が現れるのは、これらが述語 (predicate) である動詞と意味の上で密接な関係にある項 (argument) であり、項構造 (argument structure) ⁵ を反映したものである。語彙挿入は、辞書部門から成されるのであれば、項構造が直接反映された構造が作られるのはごく自然な考え方である。それゆえ、(12) の例が示すように、主語名詞句を修飾しているはずの遊離数量詞が主語位置から離れた位置に生じる現象も (7) のような構造を仮定し、項構造を反映した動詞句内部から外項 (external argument) が IP の指定辞位置に移動すると考えるときちんと説明ができる。以上のことから、(7) のような構造を仮定することには一定の妥当性があるように思われる。これまでの議論から、(7) のような構造を仮定すると時制要素が独立した位置を占め、語彙範疇とは異なる機能範疇としての位置づけをもち、一定の文法的な機能を果たす要素として位置づけられるということが明らかになった。このことは、三単現に関わる第 1 の要因として時制が関わっているという先に指摘した事実にも合致する望ましい分析である。

しかし、(7) のような構造は利点ばかりではなく、疑問もある。前節で見たように、屈折語尾に関わる要因は時制だけではない。主語や人称による一致という現象も多いに関わっている。では、機能範疇 I に入る要素としては、時制と一致を一緒にしてよいのであろうか。しかし、両者はどう見ても機能上異質な要素であり、これらを同じ範疇内に同時に入れても構わないのかという疑問が湧いてくる。これに対して、Pollock (1989) 以降、機能範疇 I を分離する仮説が提唱された。⁶そこで提案されたのは、たとえば次のような構造である。^{7, 8}



この構造では、(7) の I を Agr と T に分離して表している。AgrS の位置に主語との一致要素が現れ、T の位置に時制要素が現れるとされている。このような構造は、屈折接辞に関わっている時制と一致という要素を別々に仮定しているので、一見妥当な考え方のように思えるかもしれない。しかし、これにも問題がある。これらは機能範疇である。機能範疇は語彙範疇とは異なり、何らかの文法的な機能を果たす範疇でなければならない。時制が文法的な機能を果たすことに異論はないと思われるが、一致の要素が文法的な機能を果たしているかは多少疑問のあるところである。というのも、一致というのは、主語の人称や数と関連している。これは主語名詞句の語彙的意味と関連していると考えられよう。そうであれば、これを機能範疇として確立するのは無理がある。実際、生成文法の最近の傾向としては、Agr は機能範疇から除外する考え方が一般的である。⁹このような、一致に関する現象をどのように分析するかということも検討しなければならない。さらに、(7) のような構造を仮定するにしても、なぜ主語が移動しなければならないのかという点も問題になろう。これについては、後ほど検討するが、その前に時制の機能の問題について先に検討することにする。

3 法制と時制

ここで、時制の要素に関して、別の観点から見た場合に一つ考えなければならない点がある。先に出した次の例 ((14) = (9), (15) = (10)) をもう一度考えてみよう。

- (14) a. He does snore.
 b. Does he snore?
 c. He does not snore.
 (15) a. He will snore.
 b. Will he snore?
 c. He will not snore.

(14) の例のように時制要素だけが現れる場合と、(15) の例のように法助動詞が現れる場合、両者には共通点が見られる。すなわち、疑問文形成と否定文形成に関わる要素として、(14) では時制要素、(15) では法助動詞であることは明らかである。すると、この両者は文法機能として同じような働きを果たしていると考えられそうであるが、一致という観点から見ると両者の違いが浮き彫りになる。次の例を見てほしい。

- (16) a. He snores.
 b. He snored.
 (17) a. He will snore.
 b. He would snore.

(16) の屈折語尾を含んだ場合も、(17) の法助動詞を含んだ場合も、いずれも時制によって形態が変化する。ところが、次の対比を見てみよう。

- (18) a. He snores.
 b. They snore.
 c. I snore.
- (19) a. He will snore.
 b. They will snore.
 c. I will snore.

(18)の時制接辞しか現れていない例だと、主語の人称・数によって一致を起こすが、(19)の法助動詞を含んだ例では、主語の人称・数による一致は起こらない。これは、どのように考えるとよいのであろうか。

Langacker (1991b: Ch. 6)によると、法助動詞と時制は共にgroundingという一種の叙事的な働きを共にもつと主張されている。すなわち、命題内容をどこに位置づけるかという働きという点では共通しているのである。違いは伝達する叙述内容を位置づける場所である。Langackerの次のモデルで考えてみよう。

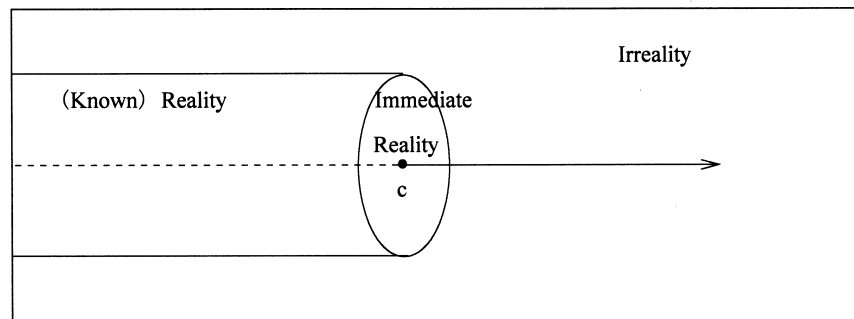


図1

(Langacker (1991b: 242))

時制要素は図の中の円柱の内部、すなわち既知の事実世界に出来事を位置づける。もし現在時制なら、概念化する者 (conceptualizer) cのいる場を中心とする円柱の底辺部分に位置づけることになるし、もし過去時制ならそれより左側の円柱内部に位置づける。これに対して、もし法助動詞を用いた場合は、円柱の外側の非事実世界に位置づけるのである。こういう働きを見ていくと、法制と時制とは異なる概念ではなく、実は同じ概念で捉えることが可能である。¹⁰

4 有標と無標

さて、本節では、今まで見てきたさまざまな観察と理論的分析をもとに、なぜ三単現の場合に屈折接辞が現れるのかという問題への答えを考えてみたい。鍵となる概念は有標 (marked) と無標 (unmarked) である。次のような例文の対比を考えてみよう。

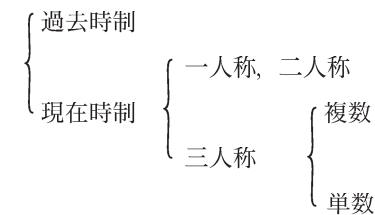
- (20) a. I snore.

- b. I snored.

(20a)は現在時制の文、(20b)は過去時制の文である。英語に時制は2種類しか存在しない。現在時制と過去時制の2つである。ある範疇の要素に2つの選択肢しか存在しない場合、それぞれの要素に別々の印を付けることは可能であるが、それよりも一方に印を付け、もう一方には印を付けない方が経済的である。(20)もまさにその典型的な例である。(20b)には過去時制を表す語尾-edが現れているので、過去時制の表示は明示的である。しかし、(20a)の方には、何の語尾も付いていない。だからといって、こちらに時制が現れていないわけではない。こちらは過去時制を表す語尾を付けないことによって、現在時制ということを表しているのであって時制はちゃんと存在する。つまり、(20a)が無標、(20b)が有標ということである。有標・無標の対立は、標準対特殊という風に考えられる。この有標理論を用いて(20)の例を考えてみると、我々は常に現在というときに存在している。そうすると、過去と現在では、現在が標準となり、過去が特殊と見なされるのはごく当然のことである。それゆえ、過去時制の方が有標になり現在時制が無標とされるのである。

この考え方を三単現の屈折接辞に拡大してみよう。もう一度(6)について考えてみよう(ここでは、(20)として表す)。

(20)



三人称対非三人称(一人称と二人称)は、コミュニケーションの場の外か中かという違いに通じる。コミュニケーションは情報の伝達者と受信者の間で成り立つ。コミュニケーションの場に存在する情報の発信者と受信者が標準となり、この場にはない第三者を特殊とみなすのはごく自然な認識であろう。それゆえ、三人称の方を有標に、非三人称の方を無標にするのではないかと考えられる。

次に単数と複数の違いについてである。主語というのは、その文で表された出来事の行為者であることが多い。行為者はその出来事に関与している人物である。主語で表された人物が複数存在する場合は、その行為に対する責任の所在が拡散してしまうが、行為者が単独の場合、その行為に対する責任は全て単独の行為者にかかってくる。伝達しようとしている出来事への関与者が単独で起こした行為を話し手は特殊な事例として伝達しようという意識が働いてこちらを有標にすると考えるのは無理のない考えである。言葉で出来事の全ての側面を伝えることは不可能である。それゆえ、話し手は伝達内容をしぼらなければならない。その場合、話し手が強く認識している側面を言葉で表すものである。そう考えると、同じく一致でも文法上の性については表記されないことも当然のことと思われる。

さて、ここで法制の問題に立ち戻ろう。法制の現れた発話は、非事実の世界に位置づけられる出来事である。非事実世界の出来事と事実世界の出来事とでは、後者の方が標準的であるのは言を俟たない。非事実の世界の出来事に関与している行為者への関心は薄いのである。それゆえ、この場合の主語の人称や数についてはあえて記す必然性を感じないのだと考えられる。

このことを裏付ける事実を最後に指摘して議論を終えることにする。次の例を見てほしい。

(21) a. I believe that he is honest.

b. I believe him to be honest.

(21a) の補部節は定形節であり、ここでは時制と主語の人称・数による一致が観察される。これに対して、(21b) の補部節は非定形節であり、この場合には時制や主語の人称・数による一致は見られない。(21b) の非定形節に現れている不定詞標識toは本来前置詞から発達したものである。その意味は、「方向性をもった着点」である。着点に示されるのは前置詞の場合、場所であるがこれが出来事に拡張されてきたのが不定詞節である。従って、不定詞節で表された出来事は発話者から離れた出来事という意味合いがあり、その出来事を実際の場面とは結びつけず客観的に捉えている感じがする。それは次のような例を見ると明らかである。

(22) Smoking is a bad habit.

喫煙の習慣はよくないというとき、誰が喫煙を行うかいつかということは問題にしていない。いわば、普遍化した表現なのである。こういう非定形節の場合にも、時制はおろか主語の人称・数による一致がないのもこれらが特殊な状況であるという意識があるからである。

以上のように考えてくると、主語の人称・数による一致という現象は、一定の文法機能というよりも語彙項目中の特性というように見なす方がいいのかもしれない。そうすると、(13) の樹形図のように、時制以外に一致という範疇を仮定する必要はないであろう。実際、最近の分析ではAgrという範疇を仮定するのは一般的ではない。

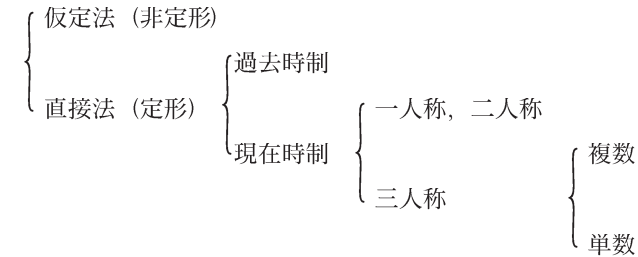
最後に (7) の構造を仮定したときに、なぜ主語名詞句が動詞句内部からIPの指定辞位置に移動しなければならないのかという問題について考察しておく。(21b) の埋め込み節を見たとき、もう一つ気がつくのは、主語が主格の形態をとっていないという点である。対応する (21a) の例では主格になっていることから、この差はIの要素が定形か非定形かということが関係してくると思われる。この格の決定にIという機能範疇が関わっているものと考えられる。最近の極小主義の分析によると主語の人称・数による一致とか格は、Iという主要部とその指定辞位置との間で素性の照合 (checking) によってなされていると考えられている。VPという語彙範疇の内部では、これらの照合が行えないので、IPの指定辞位置に移動しなければならないというのである。

5 結論

以上見てきたように、三単現の屈折接辞を表記するのは、事実の世界における有標の出来事の特

殊なものとして捉えているからであり、有標・無標に関わる概念を図式化すると以下のように示すことができる。この屈折接辞という有標で示すのは、事実世界の出来事において、まず伝達しようとする出来事が過去と現在という対立を有標・無標によって示し、なおかつ、現在の出来事の中でもコミュニケーションの場にはない第三者が単独で行為に関わっていることを特殊な事例として提示したいという認識が言語の形式となって現れているものと考えられるのである。

(23)



注

- 1) 過去形snoredは、不定形のsnoreに-dという語尾だけしか付いていないように見えるが、実際にはsnore+edと分析され、語形の変化は形態論上の操作であると考えられる。
- 2) (6) では、人称による対立がどちらになるかが決まった後でないと数の対立による屈折接辞の出現は決定されないかのように見えるが、人称と数に優先順位はない。関連する要因を分析したためであり、人称と数による一致は複合的に関わっているものと考えられる。
- 3) 実際には、Iという範疇だけではなく、Cという機能範疇の投射もあり、Cの補部 (complement) にIPがくるとい構造になる。
- 4) Chomsky (1986) の枠組みでは、D構造 (D-Structure) では、VP内部に項構造 (argument structure) が反映された構成になり、主語もこの中の指定辞 (specifier) 位置に生成される。その後、主語はIPの指定辞位置に、非定形の述語動詞snoreはIの位置へ移動しS構造 (S-Structure) が派生されると考えられているのであるが、ここでは屈折接辞の分析に焦点を当てたいので、あえて外項 (external argument) の主語位置への移動だけを示し、述語動詞は元の位置のままにしてある。
- 5) 項構造については、特にGrimshaw (1990) を参照されたい。
- 6) この仮説の詳細に関しては、特にChomsky (1995) を参照されたい。
- 7) AgrSは主語との一致、AgrOは目的語との一致を表す。英語の場合、目的語との一致は見られないが普遍文法 (Universal Grammar) の立場からこの2つのタイプの一致が仮定されているものと思われる。注の3) でも触れたが補文標識 (complementizer) は、ここでの議論に直接は関わってこないでこれ以上は触れない。ここで問題となるのは時制 (T=Tense) と一致 (Agr) の2つの機能範疇である。
- 8) TとAgrの位置に関して、接辞の形態論的な記述については、Haegeman (1995: 26) あたりの議論を参照のこと。
- 9) では、一致に関わる要素はどのように分析すればよいかということが問題になる。これらは、主語名詞句や時制要素のもつ素性 (feature) と見なす考え方が一般的である。素性は、その要素を構成する特徴の一つであるから、機能範疇として独立させるよりも妥当な分析であると考えられる。
- 10) Langacker (1991b: 245) は、時制と法助動詞をimmediate/nonimmediate, reality/irrealityの対立の組み合わせと捉えている。すなわち、時制と法制は共に関係していて、immediate reality, non-immediate reality, immediate irreality, non-immediate irrealityの4つの認識領域で捉えることが可能だということである。この考え方に従えば、順番に法助動詞を伴わない現在時制、法助動詞を伴わない過去時制、法助動詞の現在形、法助動詞の

過去形ということになる。すなわち、法助動詞が現れていなくても、法制は関与しているという考え方である。この考え方であれば、本文中の (8) と (9) に示した時制要素と法助動詞の働きの類似性も説明できる。

さらには、次のような対比の説明も可能になる。

- (i) The lift has broken down.
- (ii) The lift broke down.

(Thomson and Martinet (1986: 166))

① の現在完了形の文は、エレベーターが壊れたという出来事³が現在に何らかの関わりがあるように感じられるのに対して、② の過去形の文ではエレベーターの故障は現在とかけ離れた出来事で発話時の状況に関係を及ぼさない感じがするとされている。つまり、② の例は隔たりという話し手の主観的な判断が現れているということであるが、これは法制が関わっていると考えると納得がいくのではないだろうか。

参考文献

- Bybee, John L. and William Pagliuca (1985) "Cross-Linguistic Comparison and the Development of Grammatical Meaning," in Jacek Fisiak, ed., *Historical Semantics, Historical Word-Formation*, Berlin: Mouton, 60-83.
- Carrie, Andrew (2002) *Syntax: A Generative Introduction*, Blackwell, Oxford.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in Robert Friedin, ed., *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass., 417-54.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Dederck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Haegeman, Liliane (1995) *The Syntax of Negation*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Haegeman, Liliane (2006) *Thinking Syntactically: A Guide to Argumentation and Analysis*, Blackwell, Oxford.
- Langacker, Ronald W. (1991a) *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*, Vol. I, Stanford University Press, Stanford, California.
- Langacker, Ronald W. (1991b) *Foundations of Cognitive Grammar: Descriptive Application*, Vol. II, Stanford University Press, Stanford, California.
- Langacker, Ronald W. (1993) "Reference-Point Construction," *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Pollock, Jean-Yves. (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Pustejovsky, James (1998) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Descriptive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Sportiche, Dominique (1998) *Partitions and Atoms of Clause Structure: Subjects, Agreement, Case and Clitics*, Routledge, London.
- Thomson, A. J. and A. V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar*, 4th edition. Oxford University Press, Oxford.
- Traugott, Elizabeth C. (1986) "From Polysemy to Internal Semantic Reconstruction," *BLS* 12, 539-50.
- Traugott, Elizabeth C. (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change," *Language* 65, 31-55.
- Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher (2003) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge University Press, Cambridge.